



を 読 む

河合文化教育研究所 主任研究員 丹羽健夫

こんな国の学校の先生をしてみたいと思いませんか。

夏休みがニカ月半もある。それに秋休み、クリスマス休み、スキー休みもある。休みを利用して先生方の多くは海外へ出かけたり、読書やシンポジウムに参加したりして教養を磨き上げる。

授業時間数はOECDの調査した中では一番少なく、小学校の場合、日本の1年間で700時間以上に対して低学年は500時間台、高学年は600時間台。また先生の雑務も少なく、午後4時を過ぎると学校には生徒はもとより誰もいなくなる。趣味やスポーツは地域単位でクラブがあるので学校での部活動はなく、従って先生の部活担当などない。

○ECDが3年ごとに行う学習到達度調査で、このところ連続してトップを取っているフィンランドの学校の話である。こんなに授業時間が少なくして何でトップなのか。この本はその秘密を解き明かしてくれる。

解き明かしの1番目は少人数学級である。1クラス25名ならば目も行き届くというものである。そして2番目は目の行き届く先が「落ちこ

ぼれ」を出すまいと、どちらかというところ下の方に向いていることである。このことが学習到達度調査の平均点の下支えになる。

そして3番目が先生の質である。まずこの国では先生は尊敬されている。「教師は国民のろうそく、暗闇に明かりを照らし人々を導いていく」という言葉があるそうだ。どこかの国と比べるとえらい違いではないか。従って給料はけっして高いとはいえないが、人気の高い職業だ。なんと普通科高校生の26%が教員養成課程を志望するが入学試験は厳しく、高校卒業時の全国共通の卒業試験はもとより、大学が個別に行う書類選考、記述式筆記試験、個別面接、グループディスカッションなど多くのハードルを越えねばならない。そしてある大学では志願者のうち入学できるのはたったの10%だそうだ。教員養成課程の在学期間は6年。

ただし日本と大いに違うのはこの国では高校を卒業後、一旦海外に留学してから、あるいは仕事について社会人を一度経験してから、大学に入るケースが多いようだ。従って大学入学時点の平均年齢は23歳、大学生の平均年齢は25歳とけっこう年をとっている。

実はこここのところが優れた先生を生み出す重要なポイントのように思えるのだ。大学に入る前にあるいは在学中に、海外に出かけたり仕事の経験をしたり、つまり社会性を身に付けているということだ。

先生と社会性。唐突だが江戸時代に民間から自然発生し、あれほど人気を集めて盛んであった寺子屋は、師匠たちのほとんどが本業を持っており、つまり社会性を身に付けていたのだ。フィンランドの教育、そして先生について語るとき、このことに思いを馳せざるをえないのである。

本書は4章からなり教育に関する章は第2章のみだが、他の3つの章がフィンランドの教育を生み出している社会的背景を、興味を湧かせる筆致で紹介している。



◀『フィンランド 豊かさのメソッド』
(集英社新書 堀内都喜子著)
定価 本体700円+税